

6

明治初頭日本における医療技術の受容過程

— 順天堂大学所蔵の外科器具を中心に —

月澤美代子

順天堂大学医学部医史学研究室

明治新政府が担った課題は、西洋医療技術の日本国内全域への速やかな布置であった。この技術移入とは、「点」としての個々の医療技術の紹介・受容に留まらず、医学校・病院・制度といったインフラの整備、マンパワーの育成を含んだ「面」、さらには、時間的経過をも含みこんだ「プロセス」として行われた。

こうした明治初頭の医療技術の移入・受容のプロセスの一断面を順天堂大学所蔵の外科器具「イクラセウル」と「焼灼電気器」を例として示したい。

明治4(1871)年、ミュルレル、ホフマンが来日した。彼らの臨床実践の内容は『治験録』として出版・刊行され広く紹介された。この『治験録』第6巻(明治6年7月刊)には「最近プロイセンから購入された焼截電機器」を使用した乳ガンの切除手術の具体的な症例が紹介されており、さらに、第8巻(明治6年9月刊)には、この装置の「原理」「要器」「使用上の注意」「効利」「不利」「主治」が図入りで紹介されている。

明治8(1875)年7月、順天堂の佐藤進が帰朝し湯島(現本郷)順天堂醫院で進の執刀による卵巣ポリープの手術が行われた。この時、使用された器具は「伊屈羅施宇爾(イクラセウル)」という、進がベルリンにおいて購入し既に前年に日本に送っておいた外科器具である。ここで「イクラセウル」はポリープの「活断」に使用されており、この症例を紹介した『順天堂醫事雑誌』には、現在、順天堂大学に所蔵されているものと全く同じ形の「イクラセウル」の図が掲載されている。

佐藤進は、この報告の中で、切断法として「電機器焼灼」を「其効伊屈羅施宇爾ニ勝ルヘシ」として紹介している。しかし、次の2点から、この器具の欠点をあげている。まず「用法甚々複雑ニテ只手術ニ臨ンテ装置ニ時間ヲ費ヤスコト多キ」こと。さらに、「之ヲ用ユルニ金ヲ費ヤスコト亦鮮ヤカナラズ」。すなわち、ランニングコストが高いため「衆医之ヲ座右ニ供シ得ベキ器械ニアラザルナリ」としている。

我が国で最も初期に刊行された西洋医療器具カタログの一つとされる松本市左衛門の『医療器械図譜』(明治11年)には、『順天堂醫事雑誌』に掲載されたものと同一の形の「イクラセウル」と、『治験録』に掲載されたものと同一の形の「電気灼断器」が載せられている。

これより先、松本市左衛門は、明治10(1877)年の第一回内国勸業博覧会に、国産の「エクラソイル」を、また、岩本五兵衛はやはり国産の「焼截電気器」を出品している。

さらに、明治14(1881)年の第二回内国勸業博覧会では石代重兵衛の出品した「焼灼電気器」が審査員の絶賛を浴びている。工人は新井清吉であり、「工夫シテ「コークス」ヲ以テ白金ニ換フルニ、大ニ其ノ値ヲ廉スルコトヲ得タリ」として、品質的には劣るが僻地での使用も可能になると、その「創意」が高く評価されたのである。

「イクラセウル」と「電気焼灼器」は、ともに明治6-7年にドイツから日本に紹介された最先端の医療器具であり人体組織の離断という同一の用途に使用された。この移入・受容には、東京医学校、順天堂醫院という卒前、卒後の医育機関における臨床実践、最初期の学術雑誌による出版公開、内国勸業博覧会という新政府主催の産業奨励・技術紹介の場での国産品の公開、医療カタログによる販売という、いずれも明治10年までに移入され整えられていた社会装置が関与しており、それぞれの医療器具としての特質のみならず、時代的な状況に応じた取捨選択のもとに受容が行われていった。